

富士川義之（ふじかわ よしゆき）

1938年生れ。

東京大学大学院博士課程修了。東京都立大学人文学部助教授を経て、現在、東京大学文学部助教授。

著書 『風景の詩学』（白水社）『幻想の風景庭園』（沖積舎）

訳書 ナボコフ『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』（講談社）、『断頭台への招待』（集英社）、『青白い炎』（筑摩書房）、ダレル『トゥンク』『ヌンクアム』（筑摩書房）、ワイルド『ドリアン・グレイの画像』（講談社）、ペイター『ルネサンス』（白水社）、チェスタトン『アポロンの眼』（国書刊行会）ほか

記憶のランプ

昭和六十三年十月十五日発行

著者 富士川義之

発行人 沖山隆久

発行所 株式会社沖積舎

東京都千代田区神田神保町一五二郵便番号一〇一

電話二九一五八九一 振替東京三二七七六三一

好文印刷＋東光 小高製本

ISBN4-8060-7509-4 C1098

記憶のレシピ

富士川義之

沖積舎

記憶のランプ

富士川義之

目次

I 文学と記憶―ワーズワス、ブルースト、ナボコフ ピップの原風景―『大いなる遺産』をめぐる 建築を読む―ラスキン、ペイター、ブルースト ある唯美主義者の肖像―ウォルター・ペイター II 樹木の神秘主義―パウンド パウンドの政治学―オルソンに即して 英国の未来派―ウィンダム・ルイス 一九二〇年代の恋人―ナンシー・キューナード III ゴシップの漂う別世界―アガサ・クリステイー 熱帯のバラード J・G・バラードとカタストロフィーの風景 イングランド讃歌―ジェフリー・ヒル 初出一覧 あとがき	8	26	58	73	102	123	135	151	174	188	207	223	252	253
--	---	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

文学と記憶

——ワーズワス、ブルースト、ナボコフ

1

子供の発見ということが近代における重要な現象の一つであることは知られているが、それは記憶の発見ということとほとんどまったく切り離しがたく結びついた現象でもあると言つてよい。少くとも文学と記憶の関連性について考えるとき、子供の問題、すなわち幼年時代についての回想と記憶が何よりもまず大きくクローズアップされるのである。ジョルジュ・プーレは『人間の時間の研究』の啓発的な「序論」で「十八世紀の偉大な発見は記憶の現象の発見である」と指摘したが、実際、回想のなかに自己を発見するとか、自己の起源を求めて記憶の深層を掘り起こすなどといった文学的傾向がとりわけ顕著になるのは、周知のように、十八世紀後半以後のことである。さらにそうしたロマン主義的な傾向の頂点に立つルソーとワーズワスが、それぞれ、自伝的な散文や長篇詩を書くことによって、幼年時代についての記憶の世界を果敢に切り拓いて新紀元を画したこともまた、こと新しく述べるまでもない、近代文学史の常識事項であらう。

こうした事柄を取り敢えず踏まえたうえで、文学における記憶の機能という、決して一筋縄では行かない、大変厄介な課題についてあれこれ思いめぐらしているときに浮んできた名文句がある。“Proust had a bad memory”というのがそれだが、これは比較的短いながら、犀利な観察と洞察にみちた、ごく初期のサミュエル・ベケットの評論『プルースト』（一九三二年）のなかに見出せる一句である。これを吉田健一は「プルーストは悪い記憶の持主だった」とかつて訳したことがあるが、この場合の「悪い記憶の持主」が反語であることは言うまでもなからう。丸善の二階で立ち読みをしていたときにこの名言を見つけて衝撃を受けたという吉田氏は、評論、小説を問わず、数多いその著作のなかで、これをかなり頻繁に引用しているのだが、たとえば『東京の昔』にこんな一節がある。

Proust had a bad memory なんてその通りでせう。もし所謂、記憶がいい人間ならばあんなことは覚えてゐやしない。それにプルーストは思い出してゐるんぢやなくて記憶の作用をしつこく分析してゐるんでせう。あんなに意識的ぢやもの覚えがいいとは言へませんよ。

ベケットも吉田健一も「悪い記憶の持主」としてのプルーストに執拗にこだわりつづけ、その独特なこだわり方を通じてプルーストにおける記憶の意味作用を鮮やかに剔出してみせている。西

曆紀元前の何世紀にどういふことがあつたなどというやうなことを、ただ機械的に覚えてゐるだけで、そういう既成事実のみを、いつでも、際限なく引き出せる人を良い記憶（博識）の持主だとすれば、『失われた時を求めて』の作者は「悪い記憶の持主」と呼ぶほかない、いわゆる良い記憶の持主とは決定的に位相を異にする記憶の持主だというのが、吉田氏及びベケットの所論にほかならないのである。この反語としての「悪い記憶の持主」というプルースト理解は、記憶は必ずしも個人の自覚した意志によつてのみ甦るものではないことを明らかにしたこの大作家における記憶と文学のかかわり合いを一言で要約した大層印象的な表現だと思う。と同時に、これは、ひとりプルーストのみにとどまらず、ルソーやワーズワスからナボコフにいたる、あるいは吉田健一にいたると言つてもよい、記憶と時間への強い執着を基盤としながら自己の文学世界を築き上げていった多くの文学者たちにも当てはまる名言ではないのか。敢えてそう言つてみたくもなるほど、まったく人の意表をつくベケットの寸言は、知性や習慣や用途や目標などの軛に縛られた日常的記憶とは異なるもう一つの記憶、心の内奥に埋もれたまま発掘されるのを待っている、いわば宝物に等しい深層の無意識的記憶への強烈な関心に突き動かされた、一群の文学者たちの特性を鋭く衝いてゐるように思われるのである。『失われた時を求めて』の第一篇『スワン家のほうへ』の第一部「コンブレ」で話者がこんなことを言つてゐる。

過去を喚起しようとつとめるのは空しい労力であり、われわれの理知のあらゆる努力はむだである。過去は理知の領域のそと、その力のおよばないところで、何か思いがけない物質のなかに（そんな物質があたえてくれるであろう感覚のなかに）かくされている。その物質に、われわれが死ぬよりまえに出会うか、または出会わないかは偶然によるのである。（井

上究一郎訳）

ナボコフがブルースト論（『ヨーロッパ文学講義』所収）のなかで繰り返し注意を促しているのだが、話者が過去の思い出の意味、つまりその芸術的重要性を本当に理解するようになるのは、たとえばこの引用文の直後に提示される高名なプチット・マドレーヌの挿話からも明らかなどおりである。つまりそれはマドレーヌの一切れをひたした紅茶を一口飲んで、突然、原因不明のすばらしい快感に襲われる瞬間ではないのだ。紅茶とマドレーヌの味が、コンブレーで過した遙かに遠い少年時代の記憶を話者に甦らせるのだが、そうした現在の感覚と過去の記憶との結合から生じた幸福と歓喜の衝撃を、ずっとのちに回想を通じて辿り直したときに初めて、その衝撃のもたらした意味や重要性を話者は明確に把握するにいたるのである。このようにして理知や知性や意志の働きによって過去を喚起させようとするあらゆる努力の空しさが強調されるとともに、過去の貴重な宝物は何か思いがけない物質（マドレーヌをひたした紅茶など）のなかにひそんでおり、

そのような物質との偶然の出会いを契機とするいわゆる無意識的回想によってのみ、過去を喚起させることが可能だという、時間の形而上学が築かれていくのである。『失われた時を求めて』が過去の生活をありのままに記述したものではなく、さまざまの人生経験を経た話者が、その人生を想起するままに記述したものであることは言うまでもなからう。ヴァルター・ペンヤミンは評論「マルセル・ブルーストのイメージについて」のなかで、この作品における無意識的回想は、「普通回想と呼ばれているものよりも遥かに忘却に近い」とさえ述べている。つまりわれわれは、「目標と結びついた行動、さらに目標に縛りつけられた回想」にとらわれた昼間の生活に没頭するあまり、ちやうど昼間が夜のなごりをあとかたもなく消し去るように、「忘却がわれわれのなかに織りなしたような過去の生活」を意識下に追いやってしまう。ところがブルーストは、昼の思考にはなじめず、「忘却の織りなす編み細工や飾り模様」を一つ残らず逃すまいとして、暗幕を張った部屋に電燈を燈して昼を夜に変じ、記憶の糸をたぐり寄せるといふ仕事にすべてを捧げたのだった。無意識的回想の場面がしばしば夢の雰囲気をただよわせているのもおそらくそのためなのであろう。

ペンヤミンの言う「忘却」は、その反理知的・反意志的性格において、明らかに、ベケットの「悪い記憶」と結びつく局面を多分にもっていると思うが、ここで、ブルーストと同様じく幼少期の記憶のイメージに呪縛されていたワーズワスにしばらく眼を転じてみたい。ワーズワスもま

た「悪い記憶の持主」にはかならないからである。

ワーズワスの場合、ブルーストの無意識的記憶にあたるものは、もちろん“Spots of time”（時点）である。プチット・マドレーヌをひたした紅茶の味は話者に奇蹟的な幸福感をもたらし、「人生の転変を無縁のものにし、人生の災厄を無害だと思わせ、人生の短さを錯覚だと感じさせた」。これとほとんど同様に、自伝的長篇詩『序曲』の詩人もまた、脳裡の奥底にこびりついたすこぶる印象的な幼年時代の経験を回想を通じて一瞬のうちに甦らせることによって、それを単なる感傷的なノスタルジアの対象としてではなく、現在の孤独や耐えがたい精神的空虚感から解放し「生命を甦らせてくれる力」をもつものとして、把握する。詩人の疲弊した心に強く訴えかけてくる、そのような過去の貴重な経験を包含する断片的な記憶のイメージが、「時点」と呼ばれるものなのだが、記憶の力が自分にとってどのような意味をもつのかということに触れて、『序曲』（一八〇五年版）第十一篇で詩人はこう語る。

おお！ 何という人間の神秘であることか、どのような深淵から

お前の数々の誇りが生れてくるのだろう。私はいま道を

見失ってはいるものの、純真な幼年時代のうちに、人間の偉大さが

根ざしている、その基盤のようなものを見るのだ。また

こうも感じるのだ。つまり与えなければならないのは

人間のほうからであり、さもないと絶対に受取ることもできないのだと。

遠く過ぎ去った日々が、ほとんど生のあけぼのの時期から

私に甦ってくる。つまり私の力のひそんでいる場所が

いまや開かれたように思えるのだ。近づく、それは閉じてしまう。

いまはわずかに垣間見られるだけだ。年をとれば

ほとんどまったく見られないかもしれない。だからこうして

まだよく見えるうちに、言葉で表現できるかぎり、

自分の感じていることに実質と生命とを与えておきたいのだ。

将来、元気を回復するときのために、過去の魂を

大事に保存しておきたいのだ。

ワーズワスはここで「純真な幼年時代」についての記憶の回復ということがもたらす精神的治癒力について語っている。現在の不幸は「遠く過ぎ去った日々」を甦らせることによって、その過去をふたたび生き生きと感覚し、そのなかでふたたび生きることによってのみ癒やされるといふ、ブルーストとも、あるいはナボコフとも明らかに共通するところのある記憶の重要な機能に

ついて語っているのである。過去を再構築するためには、意識的な行為としての単純な記憶だけに頼ることはできない（「近づく、それは閉じてしまう」）ことは言うまでもないが、それにしても幼年時代についての回想と記憶がなぜ精神的治癒力、「生命を甦らせてくれる力」をもつものとして扱えられるのか。何よりもまずそれが身体的感覚を伴った感覚的記憶だからである。頭で覚えたことは忘れがちだが子供の頃身体で覚えたことは容易には忘れぬというのは周知の経験的事実だが、その感覚的記憶がとりわけ幸福の瞬間と結びついているとき、回想の行為は、現在の不幸を過去の幸福に変えることにあるとでもいうように、一種恩寵の光に包まれることにもなるだろう。ワーズワスは短詩「諫告と返答」のなかで、「われらの肉体はどこにあろうとも／意志のいかんにかかわらず、感ずるもの」と述べているが、「肉体の眼」とか「肉体の感覚」とか、あるいは「壮大な耳目の世界」などというように、身体的感覚の重要性を折にふれて強調するのも、過去との持続の感覚、内的時間の連続性の感覚という一種靈妙な力が与えられるのは、何はさておき、感覚的記憶を通じて、ということを知悉していたからだと思われる。視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚といったすべての感覚（五感）と結びついた記憶を甦らせることが、ワーズワスにとって最重要課題であったゆえんである。ナボコフの自伝『記憶よ、語れ』第八章の終りに、思わず息を呑むほどに鮮かに提示されているのは、このうえもなく精緻に再構築された、このような感覚的記憶の、現代における完璧な実例である。